

近世・近代における中国語の「～哥・～姐」の 受容と展開*

羅工洙**
gsna@ynu.ac.kr

＜目次＞

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1. はじめに | 4. 近代文学における「～哥・～姐」の語 |
| 2. 辞書から見た「～哥・～姐」 | 5. おわりに |
| 3. 近世文学における「～哥・～姐」の語 | |

主題語: 唐話学(Chinese Study)、白話語彙(Chinese spoken language)、人称・呼称(Appellation)、漢字表記
(Chinese character)

1. はじめに

本稿は、近世や近代の文学作品に現れる中国俗語(白話語彙ともいう口頭語を指すので、以下は中国語という用語を使用)の受容とそれにまつわる意味用法を考察するものである。

近世以来、所謂唐話学の流行により、中国語を学ぶ動きが強まった。その影響の下、言葉の世界にも変化が起り、それまでは中国語があまり用いられなかった文学の中にも浸透するようになった。では、どういう語が日本文学の世界に用いられるようになったのであろうか。筆者は現在、日本の近世や近代に現れる中国語のうち、人称・呼称をめぐる漢字表記を体系的に考察しているところである。今回は、兄弟を表す「～哥・～姐」について、具体的に日本にはどういう語があり、どのように用いられていたのかを見ることにする。「～哥・～姐」は「兄・姉」に当たるのだが、「弟・妹」は、中国と日本で古くから共通した表記となっているので、本稿からは除くことにする。

本稿で取り扱う「～哥・～姐」については先行研究では殆んど触れられていないように見えるが、その数少ない研究として、白話文学に現れる語彙・語法を忠実に考察してきた香坂

* 本研究は2016年度嶺南大学校第一次校費支援により作成された。

** 嶺南大学校 日語日文学科 教授

順一¹⁾の研究の中から『水滸伝』の研究を紹介しておく。これは研究というよりは語彙的で、『水滸伝』の語彙のうち現代中国語に残っている意味の異なっている語を主に紹介したものである。香坂は「大哥」について、『水滸伝』では「直接夫に対する稱謂」であるが、現代語の意味は「①一番上の兄に対する稱謂。②年齢が自分と同じくらいの男性に対する尊称」で、白話語彙と現代の中国語は形態は同じであるが、意味が変わっていると述べている。「大姐」については「老婆」の「したしみをこめた稱謂」であるとしている。「大哥・大姐」は、つまり、現代中国語とは意味が異なるが、中国の明・清時代の口頭語であったことが窺われる。香坂はまた「阿哥」(兄弟あるいは兄弟と喚び合っている間では、尊敬の語気をもっている)も紹介していて、基本的に「〜哥・〜姐」は口頭語であることが分かった。香坂の他の著作には「兄弟姉妹」を表す語は紹介されていない。

小田切文洋²⁾は『唐話用例辞典』に兄弟姉妹を表す例を載せている。その意味を箇条書きで提示することにする(用例は省略)。

- (1) 「哥哥」は、「兄。おにいさん」
- (2) 「大哥」は、「①長兄。②年齢が自分と同じくらいの男性に対する尊称。貴兄。」
- (3) 「姐姐」は、「①姉。②若い女性に対する呼び方」
- (4) 「大姐」は、「いちばん上の姉。②若い下女。③未婚の女性。④自分の妻に対する呼称」
- (5) 「小二哥」は、「料理や宿屋の小僧」
- (6) 「小姐」は、「お嬢さん」

『唐話用例辞典』では、「哥哥・大哥・小二哥・姐姐・大姐・小哥」の語を取り上げている。その大部分の用例は「唐話辞書」の例が挙げられていて、日本文学の例はそれほど取り上げられていない。同書には「小哥」の例は載っていない。また、「小姐」が「妹」というよりは「お嬢さん」の意味として用いられるのも異様である。この書は研究書ではなく用例集なので問題は残るが、「〜哥・〜姐」がやはり中国の白話文学を基盤とする当時の口頭語であることを物語っている。

日本の近世や近代文学に現れる中国語の受け入れを考察している他の研究には「〜哥・〜姐」についての紹介が見られない。近藤瑞子³⁾は人称や呼称について色々触れていたのだ

1) 香坂順一(1995)『《水滸》語彙と現代語』光生館、p.147、p.321、p.480

_____ (1983)『白話語彙の研究』光生館

_____ (1987)『《水滸》語彙の研究』光生館

2) 小田切文洋(2008)『唐話用例辞典』笠間書院、p.103、p.104、p.171、p.261、p.481、p.482

が、「～哥・～姐」と関連した兄弟姉妹の漢字表記については言及していない。遠藤好英⁴⁾の「白話由来の漢字・漢語」や小島憲之⁵⁾の研究も同じである。「～哥・～姐」は人称ではなく呼称であるので、一般的な文法書にも紹介されていないのが現状である。

筆者は、近世や近代における人称と呼称に関する漢字表記の問題をめぐって考察してきている。「乃+N」の語⁶⁾については、「乃」は元々二人称であるが日本では殆んどが一人称として用いられたこと、近代になってブームになったこと、唐話的性格も少々あったことを述べた。「所天・良人」については、中国では多様な訓があったが、日本では「おっと」としての意味で用いられていて、やはり唐話的要素も少々あったことを述べたことがある。

こうした考察に続いて、近世や近代における「～哥・～姐」の語について考察することにするが、普通は「～兄・～姉」と表してもいいのに、強いて「～哥・～姐」の語を用いていることは何を意味しているのだろうか。それは、筆者がこれまでの論考でも繰り返し言及しているように、唐話学、つまり中国語の影響であることが大きいということになるだろう。それまでにあまりなかった漢字・漢語が近世・近代の日本文学にも浸透しているが、それは近世以来の唐話学の影響であり、それに伴う漢字表記の世界にも影響を及ぼしたことを明らかにしたい。

2. 辞書から見た「～哥・～姐」

まず、「～哥・～姐」がどういう性格を持っていたのかを詳しく見るために、中国の漢語辞書『漢語大詞典』を見る必要がある。それから「唐話辞書」や明治期の「漢語辞書」を見ることにしよう。

では、『漢語大詞典』において「～哥・～姐」がどのように説明されているのかを見てみよう。調べた結果、「哥」と関連しては「哥・哥哥・哥子・哥兒・哥們・大哥・小哥・小哥子・

3) 近藤瑞子(2001)『近代日本語における用字法の変遷—尾崎紅葉を中心に—』翰林書房、pp.32-72

4) 遠藤好英(1988)『近代文学と漢字』『近代文学と漢字 漢字講座9』明治書院、pp.25-30

5) 小島憲之(1983)『ことばの重み—鴉外の謎を解く漢語』新潮社

_____ (1988)『日本文学における漢語表現』岩波書店

_____ (1995)『漢語逍遙』岩波書店

6) 羅工洙(2015.12)『近代に於ける「乃+N」の語の意味用法について』『日本語文学』第67輯、韓国日本語文学会、pp.1-28

_____ (2016.02)『近世・近代に於ける「所天・良人」について』『日本近代学研究』第51輯、韓国日本近代学会、pp.7-35

小二哥・小大哥・阿哥・大阿哥・小阿哥」の例があり、「姐」には「姐・姐姐・大姐・大姐姐・大小姐・小大姐・小祖・阿姐」の例が見られる。紙幅の関係上、これらの見出し語を全て提示することはできないので、「大哥・小哥・大姐・小姐」のみ、例を省略した形で示すと次の通りになる。

- 大哥 ① 排行最大的哥哥。唐白居易『祭浮梁大兄文』
- ② 尊称與自己年紀相仿的男子。『水滸伝』
- ③ 稱排行最大的儿子。宋周密『武林舊事・乾淳奉親』
- ④ 妻子稱丈夫。元無名氏『硃砂担』
- 小哥 ① 对少年或年輕男子的客气称呼。元
- ② 对年輕的官僚子弟的尊称。元
- 大姐 ① 排行最大的姐姐。宋洪迈『夷堅乙志・畢令女』
- ② 对女性的尊称。
- ③ 对妻子的称呼。『水滸伝』
- ④ 对妓女的称呼。元閔漢卿『救風尘』
- ⑤ 稱妓院中的使女、
- 小姐 ① 宋時稱樂戸、妓女等。至清代仍有此称呼。宋洪迈『夷堅乙志・傳九林小姐』
- ② 稱縉紳仕宦家青少年女子。元
- ③ 稱妻子。猶夫人。明賈仲名

「へ哥・へ姐」の使用は唐以後の例であり、殆んどが当時の口頭語の資料に見られることから、明らかに中国語であったことが分かる。その意味は基本的に「兄・姉」であるが、男性や女性に対する尊称の意味があり、女性の場合は「妓女」の例もある。「大哥・小哥・大姐・小姐」以外の語も、唐以後、特に元明清代の例文が多く、やはり主として口頭語の資料に見られることから中国語であることがわかった。「へ哥・へ姐」の各語の意味用法については、日本文学に現れる例がある場合、『漢語大詞典』の例を少々言及することにする。『大漢和辞典』にも「へ哥・へ姐」の語が現れているが、用例数は少い。また、『日本国語大辞典』(第2版、以下『日国大』と呼ぶ)には「へ哥・へ姐」と関連した見出しは「小姐」を除き、外には見られない。一応、このことから考えると、「へ哥・へ姐」の語は、日本では漢語としての定着はしていないことが分かるだろう。

それでは、中国の俗文学に用いられていた口頭語であったことを確認するために、近世以来刊行された「唐話辞書」(汲古書院による)やその他の資料を通して例を見ることにす

る。「唐話辞書」は、中国俗文学に現れている難解な語を集めて解釈したものである。

『語録訳義』(延享5年?)

大哥 朱舜水云哥兄也。友信按ニソノ人ニ対シテソノ人ヲ呼ブ尊号ナリ倭語ニ貴様ト云ガ如シ

阿哥 アニサマ 阿姐 アネサマ 姐夫 アネムコ

『俗語解』(刊行年間未詳)

^{ユウユウ}哥哥 類云哥哥兄也〜 ^{フヒメ}姐姐 フヒメサマ〜 ^{フムス}小姐 フムスメゴ。フヒメサマ。 ^{オウ}大姐 開笑娣女郎

『訳通類略』(明治年間写本)

哥哥 オマヘ 哥哥 アニ 大哥 オホアニ 小哥 次兄

令愛 オムスメ子。小姐 同。姐 同。姐姐 トモ。

『唐話為文箋』(明治12年写本)

小姐 フヒメサマ 姐姐 同上。

『兩國譯通』(刊行年間未詳)

^{タアチイ}大姐(アネ) ^{タアコウ}大哥(オホアニ)

『劇語審譯』(幕末伝来本)

姐姐 ムスメ。大姐 同。小姐 同 哥哥 兄ナリ。大哥 大兄ナリ

『学語篇』(明和9年)

哥哥
ア ニ

『中夏俗語藪』(天明3年)

姐姐 フヒメサマ

『徒杠字彙』(安政7年)

大哥 醒世恒言アニキ 哥哥 類集纂要、兄ナリ

『唐話使用』(享保20年)

^ル靠ニ ^ノ哥哥^ス做^ヲ〜主(カウコウコウツヲチュイ) アニキノフンベツヲタノム

『唐話算要』(享保元年)

^{スヤウツユイ}小姐 フヒメサマ。 ^{ツユイツユイ}姐姐 同上。

『忠義水滸伝解』(宝暦7年)

^{ダアコウ}大哥 哥ハ兄ノコト也俗ニ人ヲ指シテアニキト云ガ如シ

^{ダアコウ}大哥 兄キ又ハ親方ト少シアガメテ心安ク云辞

^{コウコウ}哥哥 兄キト云コト ^{スヤウコウ}小哥 ワタクシ自称ナリ

大姐 ^{ダアチイ} 妻ニテモ大嫂ト呼ガ如シ慰懃ニ云詞也姐ハ姊ノコト也

『水滸伝抄訳』(天明年間)

望ニ^ヲ哥哥^ニ アニヲミモフナリ

『忠義水滸伝鈔訳』(刊行年間未詳)

姐々 アネノコト

『水滸伝訳解』(享保12年)

大哥 婦呼夫称 大哥 哥ハ兄ナリ 姐夫 アネムスコヲ称スルナリ 哥哥哥ハ兄ナリ兄ト云カ如シ

姐姐 弟呼女兄曰姐即アネイモトヲ姐妹姉妹ト云ナリ称スルユヘ姐姐ト云ナリ

姐夫 アネムコヲ称呼スル辞

『忠義水滸伝』(享保12年)

哥哥 アニブン 老哥 ヲヤヂ

『忠義水滸伝考』(刊行年間未詳)

姐夫 姉ムコノコト 大哥 哥兄ナリヲヤカタナリ

『水滸伝字彙外集』(写本、未詳)

大姐 妻ヲ云スコシアガメテ云ココロナリ

大哥 ヲヤカタ 哥哥 アニキ

『支那文典』(大槻文彦解、明治10年)

像^{ヘバ}求^ムニ大哥^ニ給^{タメニ}レ我^{ヨメ}念^ミニ這^{コノ}封^ヲ信^ニ。大哥ハ大兄トイフガ如ク念ハ讀ノ如シ封信ハ書翰ナリ

『諸録俗語解』(写本、刊行年間未詳、横浜市立大学紀要123、1961年3月)

老大哥 哥ハ兄也大哥トハシタシム辞也

『雅俗漢語訳解』(明治11年)

哥哥 類云、哥哥兄也、今人呼ニ其兄^ニ曰ニ哥哥^ニ見ニ漢武故事^ニ

大姐 ^ソムスメ又カミ様ト云ホドノ尊称ニモナル

『小説字林』(明治17年)

シヤ^フ 姐夫 アネムコ カ^カ 哥哥 アニキ

『魁本大字類苑』(谷口松軒編著、明治19年)

ツギノ^アニ^ニ オチヤウ^{サマ} アニ^{サマ}
小哥 小姐 阿兄、阿哥

ア^ニキ 大哥 阿兄ト同シケレトモ借テ他人ヲ呼フニ用ユ

ジヤウ^{サマ}
姐姐 ムスメゴ 小姐 ヨノムスメ

『支那小説字彙』(藤井理伯算輯、明治43年)

ダイ カ アニキ ダイ ショ 大姐 姉ムスメノコト又尊称ニモナル

ショ ショ オヒメサマ、又母ヲ称シテ、姐姐ト云フ、又弟ガ姉ヲ称シテ姐ト云フ

ショ フ アネムコ、又姪家ニテ、客ヲ称シテ姐夫ト云フ

「唐話辞書」や文典に見られるが、採用されている語は一律ではない。また、「～哥・～姐」の語が多く見られるが、「哥哥・大哥・小哥・姐姐・大姐・小姐」が大部分を占めている。外には「老大哥・阿哥・阿姐・姐夫」の例も見られる。「哥」系統の語には、基本的に「あに・あにき」の意味が与えられていて、たまに「おっと」を指す場合もある。「小哥」の場合は、「次の兄」とか「わたくし」の意味にも通用しているように思われる。「わたくし」の場合は、『漢語大詞典』と異なって日本的な意味であると思われる。「姐」系統の語も「あね」が基本的な意味であるといえようが、それより「むすめ・ひめさま・おじょうさん」などの意味にも用いられ、多様な訓を持っている。「唐話辞書」などに多く出現していることから、やはり「～哥・～姐」の語は、中国俗文学に現れる口頭語であったことが分かった。

反面、日本では古くから「漢語辞書」が多く刊行されているが、「～哥・～姐」の語は漢語としての認識が薄かったのか、近世までの辞書には見られない。明治期にも実に多くの「漢語辞書」(大空社)が刊行されているが、非常に限られた資料にのみ見られる。

カ カ 哥哥 兄の義 (『漢語故諺熟語大辞林上』山田美妙、明治期漢語辞書大系52、明治34年、p.289)

カ カ アニ。人ヲウヤマツテイフコトバ。タダシ、ヲトコニノミイフモノ。オヤカタ、アニキ ナドノタグヒ。(『新編漢語辞林上』山田美妙、明治期漢語辞書大系55、明治37年、p.476)

哥哥(かか) 兄の義なり。他人を敬ひて呼ぶ語 大哥 老哥。(『漢語字彙上』久保得二、明治期漢語辞書大系58、明治37年、p.217)

大哥(たいか) 兄の敬称。(『漢語字彙上』久保得二、明治期漢語辞書大系58、明治37年、p.254)

筆者は、山田美妙の辞書の性格について、元来漢語辞書ではありながら唐話辞書の性格⁷⁾もあつたことを述べたことがある。つまり、山田の辞書には多くの中国語が登載されてい

7) 羅工洙(2004.08)「山田美妙著『漢語古諺熟語大辞典』の唐話資料的性格」『日本語学研究』第10輯、韓国日本語学会、pp.61-79

_____ (2004.12)「山田美妙著『新編漢語辞林』の唐話辞書の性格」『日本語文学』第23輯、韓国日本語学会、pp.23-50

るという特徴がある。ここでは「哥哥」の例のみであるが、「兄・あに」の敬称としての呼称が見られる。久保得二の辞書には中国語の語彙はあまりないが、「哥哥・大哥」の見出しがある異例の漢語辞書で、やはり「兄・あに」の敬称の意味を与えている。両者の漢語辞書からも、基本的な意味以外に「敬称」としての意味があることが分かるだろう。外に、明治期にも中国語の学習が行われたが、その教本にも現れている。その例は次の通りである(『中国語教本類集成』不二出版)。

『支那独語習書』(宮島大八、明治33年)

有一個^{コウ}哥々、兩個妹。～

『増訂清語教科書』(西島良爾、明治35年)

^{コウコウ}哥哥 (兄)。 ^{チエーチエー}姐姐 (姉)。 ^{チエイトイ}姐妹 (姉妹)

『支那語難語句例解』(飯河道雄、大正13年)

阿哥 皇子、兄

『急就篇』(宮島大八、昭和8年)

哥哥 姐姐

会話書には多様な例が見られなかったが、中国で用いられている言葉を学習しているので一般的な会話でも用いられていたと思われる。このことから、「～哥・～姐」の語は、中国では唐以後に口頭語として用いられていたことと、日本の近世以来の唐話辞書にも多くの例がみつかったことで普通の漢語ではないということが裏付けられた。また、中国の口頭語であったためか、日本で刊行された漢語辞書には殆んど見られないことも分かった。このような大まかな流れは把握できたが、実際の文学作品にはどう現れているのかを具体的に見ることにする。

3. 近世文学における「～哥・～姐」の語

近世に日本に伝えられた文学作品は実に多いといえよう。すべての例を挙げるのは無理である。特に、『漢語大詞典』における「～哥・～姐」の語は、『水滸伝』のような「四大奇書」をはじめ、多くの出典に多様な語が出現していたが、外にも「小説三言」やその他の作品に

も見られる。「四大奇書」の例は『漢語大詞典』にも度々紹介されているので、ここでは用例を提示しないことにする。ではまず、近世に流行していた「小説三言」における「～哥・～姐」の語の例を見てみよう。

只可^ク惜^{スルニ}哥哥^{アニキ}没^レ福^ニ受^ス容^ニ。(『小説精言』岡白駒、寛保3年、p.2ノ13ウ)6例。哥哥^{アニキ}p.3ノ13オ、2例。

想道^ヲ。姐姐^{アネ}得^ハ配^{スル}此^ニ人^ニ。(『小説精言』岡白駒、寛保3年、p.2ノ19オ)7例。

小娘子又問。大姐姐如何不^ソ来^ラ。(『小説精言』岡白駒、寛保3年、p.1ノ4ウ)1例。

你那哥哥^{カノアニキ}不^シ是好^{シビク}惹^{ナラダグ}的^ヲ。(『小説奇言』岡白駒、寶暦3年、p.3ノ13オ)6例。哥哥^{アニキ}p.344、1例。

又拜^シ他^ヲ做^シ了^ル哥哥^ト自^リ此^ニ與^ニ天^ニ瑞^ニ。(『小説粹言』平安癸疑主人訳、寶暦8年、p.4ノ7オ)6例。哥哥^{アニキ}p.4ノ4ウ、1例。

呂大哥^キ指^ス頭^ヲ說^フ出^ニ十^ニ数^ニ個^ヲ。(『小説粹言』平安癸疑主人訳、寶暦8年、p.5ノ23オ)1例。

小哥^{チハ}你是^レ那里^ノ人^ヲ。(『小説粹言』平安癸疑主人訳、寶暦8年、p.4ノ11オ)2例。

「小説三言」は、中国の「三言二拍」(明代の小説集)を再編成して訓読したものであるが、当然ながら当時の口頭語の小説であるので、「哥哥・大哥。小哥・姐姐・大姐姐」の例が見られる。無訓もあるが、辞書の訓のように、「あに・あにき・あね」と敬称としての「おくさま」の訓を当てている。「四大奇書」や「小説三言」は日本人に多く讀まれたので、この語は日本人の脳裏に刻まれたと思われる。外にもその例はある。

～在^ニ媽媽宅上^ニ請^ニ一位^ニ姐姐^{ネエサン}。(『今古奇観』宮原民平註、大正15年7月、支那文学大観11、p.114)多例。大哥^{オウキ}p.149、多例。

姐姐^{アネ}。你身子乏了。(『牡丹亭還魂記』鈴木彦次郎外訳、昭和2年、支那文学大観3、p.56)多例。小姐^{オウシヨウ}p.8、多例。

祇^タ生^ウ得^ム這^{コノ}箇^ヲ小姐^{ムスメ}。(『校注西廂記』、年、p.4)多例。

小姐^{ムスメ}(『五色石』服部撫松訳、明治16年、国会図書館蔵本、p.4ノ2ウ)多例。

一^シ發^テ出^ク落^ク得^{タリ}如^ニ花^ニ似^ニ玉^ニ哥^{アニキ}々^ニ逢^ニ貴^ニ已^ニ娶^{シテ}了^ニ一^ニ箇^ニ岳^ニ指^ニ揮^ニ家^ニ的^ニ女^ニ兒^ヲ。(『五色石』服部撫松訳、明治16年、国会図書館蔵本、p.4ノ3オ)4例。哥々^{アニウヘ}p.5ノ24オ、1例。

老哥^{オトコ}在^{マタレヨ}此等候。(『桃花扇』塩谷温註、大正15年7月、支那文学大観6、p.95)多例。

総叫^{アニブン}ニ鶴州^{フノ}哥哥^{アネサマ}庄^{フノ}哨^{フノ}一^{フノ}罷。(『桃花扇』塩谷温註、大正15年7月、支那文学大観6、p.160)多例。

姐姐。你道這人。(『補春天伝奇傍訳』広部精訳、明治13年2月、東北大学図書館蔵本、第二駒 p.10)10例

「哥哥・大哥・姐姐・小姐」が用語の中心となって用いられていたのだが、これらの語が日本に伝えられ、日本人の知識人の眼にちりばめられていたと思われる。ここで問題にしたいのは、「小姐」は「ムスメ・ムスメゴ」を基本的な訓にしているので、『漢語大詞典』に現れている意味にはない、時代の流れによる意味の変化があったのではないと思われる点である。

以上、中国では、特に明・清代の文学作品に「一哥・一姐」の語が多く登場していることがわかった。このことから、中国俗文学において呼称としての基本的な用語であることは明らかである。また、日常生活の用語であったことも窺われた。

近世に伝えられた中国俗文学の原文や訓読文も重要な資料であるが、それを翻訳して日本人に普及させた資料も大きな価値があると思われる。中国語で書かれた書物は、一般の読者には難解の文章であったに違いない。それで、近世には普通の人にも読みやすくするために、日本語の文章に翻訳し普及させている。それを所謂通俗和訳本というが、普通の日本語として翻訳されていたら、中国語である「一哥・一姐」の語が出現するはずはない。以下の資料は『近世白話翻訳集』(汲古書院)による。

カカ(アニキ) ツネキ(タシ) モモジ ユウ
哥々^{カカ} 一隻^{ツネキ} ノ腿自由ナラズ(『通俗平妖傳』平安本維芳訳、享和2年、p.110)1例、哥々^{カカ} p.13

4、1例。哥々^{アニ} p.83、1例。大哥^{タイカ} p.322、1例。

オトトギミ ツネツネア ニ ゴ ナカヨシ ナンデ ミ タノ
二大王平日^{オトトギミ} 哥々^{ツネツネア}ニ甚好我レト你ノ身ノ上ヘヲ憑マバ〜(『通俗西遊記(前編)』岡島冠山訳、宝暦7年、p.519)7例 哥々^{アニキ} p.527、6例。

コレハ^{オマヘ}哥々^{オマヘ}ノ造化ニテハナシ。小妹ガ造化ト云フモノナリ。(『繡像通俗金瓶梅』藤屋弥兵衛訳、宝暦13年1月、p.161)5例。

タイカ(アニキ) ワケ マツシキヨウス
大哥^{タイカ} 你イカガノ訳ニテカカル貧様子トナリ玉フヤト〜(『通俗醒世恒言』宿屋居主人、寛政2年、p.39)2例 大哥^{アニ} p.40、1例。大哥^{タイカ} p.212、5例。

請老娘ハ中ニ居コウヲトシヨリ ナカ小イ アニ コ哥ミキハ右ニ居イ～(『通俗平妖傳』平安本維芳訳、享和2年、p.128)2例、小カ哥p.14

4、2例。小ア ニ キ哥p.148、1例。

更ニ人事ヲシラザルワ カ キ モ小ア ゼ二シ哥ノ少シノ滋味ヲモネブラズシテ～(『通俗古今奇観』淡斎主人訳、文化11年、p.551)1例

姐アネ イモト ネヤモ妹モ房ニ入テ休息キウソクシ。(『繡像通俗金瓶梅傳』藤屋弥兵衛訳、宝暦13年1月、p.147)5例 令ゴソクジョ姐p.16

0、1例。令ゴシンブ尊令弟p.187、2例。令オトトヒ尊p.187。p.218、4例。姐オトトヒ妹p.198、4例。

一位ノ姐イ ソノ(アネサマ) コフ々ヘイヲ請テ。一杯ノ酒ヲ飲ノマント欲ヲモフ。(『通俗赤繩奇縁』近江贅世子訳、宝暦11年4月、p.122)1例。阿ア ソ姐p.121、31例。

和尚ハ在ズシテ大アラ タイショ(アネ) ウマク子 イマダ姐イマダ熟寝入テ未サメズ。(『通俗醉菩提全伝』碧玉江散人訳、宝暦9年、p.119)1

例。大タイシヨ姐p.117、6例。大ア ネ姐p.119、1例。二イモト姐p.119、2例。

アタラ大タイ ケ家ナルニ御子息ゴ シ ソクモナクタダ小セウソ(ムスメ)姐イモト一人アリ(『通俗西湖佳話』佐羽淡斎訳、文化2年、p.386)32例。哥ア ニ キ哥p.460、1例。

以下は例と出典のみを提示する。

哥ア ニ キ哥(『通俗西遊記(後編)』岡島冠山訳、宝暦7年、p.15)21例、哥カ カ哥p.33、1例。大ソコモト哥(『通俗西遊記

(前編)』岡島冠山訳、宝暦7年、p.474)2例。姐ソ ソ姐(『通俗西遊記(前編)』岡島冠山訳、宝暦7年、

p.279)1例。大ア ニ キ哥(『通俗西遊記(後編)』岡島冠山訳、宝暦7年、p.239)6例。我ワガソソ(アネコ)姐ソ々(『通俗西遊記

(後編)』岡島冠山訳、宝暦7年、p.276)1例。姐ソソ(ソモジ)々(『通俗隋煬帝外史』碧玉江散人訳、宝暦9年5

月、p.573)1例。姐アネサマ々(『繡像通俗金瓶梅傳』藤屋弥兵衛訳、宝暦13年1月、p.144)5例、姐ソ モ ジ々p.151、32

例。小ムスメゴ姐(『繡像通俗金瓶梅傳』藤屋弥兵衛訳、宝暦13年1月、p.297)1例。大たいかい(さま)哥(『忠臣水滸傳』醒

世老人山東子、享和2年、p.108)2例、哥と の々p.165、5例。姐あねさま々(『忠臣水滸傳』醒世老人山東子、享

和2年、p.176)3例。姐ゴヨラウ々(『通俗古今奇観』淡斎主人訳、文化11年、p.674)1例。小セウソ(ヒメキミ)姐(『通俗孝緒

傳』近江贅世子訳、寶暦11年、p.479)31例。姐ソ モ シ々(『通俗孝緒傳』近江贅世子訳、寶暦11年、

であったが、音訓両方を取っている。「小姐」には^{セウソ(ムスメゴ)}・^{セウソ(ヒメキミ)}・^{シヤウソ}・^{ヒメ}がある。音読には「セウソ・シヤウソ」があり、「ムスメゴ・ヒメキミ・ヒメ」といった「おじょうさん」系統の訓が見られる。その外には^{イモト}・^{アソ}・^{ゴソクジョ}・^{オトトヒ}の例が見られ、かなり多様な語が用いられている。特異な訓としては、「^{イモト}二姐」の「いもうと」の訓があるが、登場人物の立場から見れば「二番目のあね」にあたるもので、純粹の「いもうと」ではない。

翻訳文は、内容は中国文学といえども文章は和文であるので、これらの中国語の呼称の漢語や漢字表記は和文に浸透していたといえよう。但し、「カカ・タイカ・ラウカ・シヤウカ・ソソ・タイショ・セウソ・シヤウソ・アソ」のように、まるで漢語であるかのように音読をしている語が『日国大』に登載されていないことが問題である。たしかに近世の日本人に普及した和文であるので、日本語の一部として見るべきなのではないかと思われる。

「～哥・～姐」の語は、近世には中国俗文学をまねた日本人による白話小説に、その種類はそう多くはないが、人称や呼称に関する語が用いられている。

ウツムイテ ク ヤヤカタ ヤヤカタ コノ ハ ナ シ ス ムバヤンテイ ニ フホミセノ ダンナシヨ ミ ノホン フ
伏 曰。大哥。大哥。这回小説不 = 間話 = 十字街中相公。読 = 此冊子 =。(『北里懲毖録』道

凹先生著、明和4年、洒落本大成4、p.250)2例。

かゆ(おまへさま) いだき
哥々 に小衛内を抱て〜(『忠臣水滸伝』醒世老人山東子、寛政11年、和泉書院、p.110)5例。

それがし あねさま ごていゆかんへい どの
小人は姐姐の老公勘平哥々に〜(『忠臣水滸伝』醒世老人山東子、寛政11年、和泉書院、p.176)4例。

フ ヲ
請玉妃小姐家伴当人出来(『平安花柳録』快活道人纂定、p.5ウ)2例 小姐p.23ウ、1例。

姐来了(『平安花柳録』快活道人纂定、p.11オ)1例。

ワレマヅツサガシ ニ ノ (ノチカ)
俺且故問 = 姐姐 = 你家 老奶奶。(『四鳴蟬』亭亭亭逸人訳、明和年間、p.7ノ上)2例。

フ テ ケヨ フ
大姐請来扶レ俺。(『四鳴蟬』亭亭亭逸人訳、明和年間、p.7ノ上)1例。

ナリト
你的哥哥、雖 = 是微贱 =、(『海外奇談』鴻濛陳人重訳、文政3年、東北大学図書館蔵本、p.6ノ2オ)5例。

かゆ(おまへさま) ヤヤカタ あねさま
「哥々・哥哥・大哥・姐・姐姐・大姐・小姐・小姐」の例が見られる。例はそ
ア ニ イ ア ネ アネサマ ム ス タ

う多くないが、中国語の呼称を認識して用いていたと思われる。また、近世や近代の漢文戯作の資料にも見られる。寺門静軒の『江戸繁昌記』(天保3-7年)から始まる「繁昌記」類が新しいジャンルの漢文戯作として位置づけられている。主に当時の世間の様子を風刺する形の文学である。漢文で書かれてはいるが、中には中国語も多数見られるのが特徴で、所謂変体漢文である。

僕奴往クラチヨウキマ小姐ルノ遣フ婢必低声言シテ(『江戸繁昌記』寺門静軒、天保3-7年、東北大学図書館蔵本、p.1ノ34)1例。夫人尊姐ゴシンブサンヤクサントp.4ノ3オ、1例。

嫗道フ呀必是千金小姐スレ、好生可シ憐ム、(『繁昌後記』寺門静軒、明治10年11月、東北大学図書館蔵本、p.2ノ7ウ)1例。

相戯曰姐テ姐スル愛ニ金蔵ニ乎。(『都繁昌記』中嶋棕隠、慶應3年、国会図書館蔵本、p.9ウ)1例。夫妻嬢姐p.11ウ。嬢姐p.12オ。12オ。姐嬢p.28オ。

其対ニ玻璃鏡ニ狐手々々塗ニ紅粉ニ者東屋大姐也。(『銀街小誌』槎盆子、明治10年3月、明治文化全集8、p.394)1例。

能く進退に閑へる者は、某れの小姐セウソ(ムスメ)ココ頃字を学ぶなり。(『西京伝新記』菊池三溪、明治7年12月、新古典文学大系1、p.241)7例。

曰く、「小姐セウソは嫁装カイサウを需む。〜」(『本朝虞初新誌』菊池三溪、明治16年10月、新古典文学大系3、p.31)1例。大哥タイニキp.31、1例。大姐タイソp.36、1例。

難レ道忘ニ了姐々シヒルト的約ニ。(『新橋八景佳話』三木愛花、明治16年7月、国会図書館蔵本、p.13オ)5例。

小姐ヤテ呵煮レ若来。(『情天比翼縁』三木愛花、明治17年2月、国会図書館蔵本、p.23)10例、哥哥p.112、4例。大哥p.95、1例。姐姐p.19、18例。

漢文戯作やそれに準じる文章にも、「哥哥・大哥・姐姐・嬢姐・大姐タイソ・小姐セウソ(ムスメ)・

小姐ヲチヨウキマ・夫人尊姐ゴシンブサンヤクサント」の例が見られる。『本朝虞初新誌』『新橋八景佳話』『情天比翼縁』は風刺文学ではない小説であるけれども、中国語が含まれている。全般的に見て、無訓のものもあるが、音読みのものもある。また、中国のインターネットの「百度」に殆んど用いられてい

ない「嬢姐・尊姐」が特異な例として用いられている。中国のネットには「尊姐姐」の例は少々あるが、「尊姐」の例はあまりない。この「嬢姐・尊姐」は『漢語大詞典』や『大漢和辞典』には登載されていないので、はたして日本で作られた語であるかどうかは不明である。

また、近世後期には読本が新しいジャンルとして位置づけられているが、中でも曲亭馬琴の著作が有名である。曲亭馬琴の作品は実に種々あるが、「～哥・～姐」の語は限られた資料にのみ用いられている。

あにき
大哥 こなたへ渡り給へ。(『八犬伝』曲亭馬琴、文化11年一天保13年、岩波文庫本2冊、p.228)5例。

さき ごそくじよはまちごりやう こんえん
曩に令愛浜路小姐と婚媾の事をしも、(『八犬伝』曲亭馬琴、文化11年一天保13年、5冊、p.444)

ひめ
1例。小姐(7冊、p.192)13例。

あにき こたび はいい(きせき)
哥々よ、這回の売買^{しあはせ}は、近年^{まれ}罕なる造化^{しあはせ}よかりき。(『近世説美少年録』曲亭馬琴、文政11年一天保3年、新編日本古典文学全集83、p.196)19例。あにき
哥p.517、1例。

わ ぎみ あにき
「和君は大哥にあらざるや」(『近世説美少年録』曲亭馬琴、文政11年一天保3年、新編日本古典文学全集84、p.164)9例。ちやう
小姐さまp.539、2例。

ははご あにき とくいで
母御よ大哥も快出給へ。(『開卷驚奇侠客伝』曲亭馬琴、天保3年一天保6年、新古典文学大系87、p.82)2例。

あれ を ち ごまさなほめし そくちよ とま ごりやう ころ
那は叔父公正直主の息女、苦子小姐がいぬる比、(『開卷驚奇侠客伝』曲亭馬琴、天保3年一天保6年、新古典文学大系87、p.392)1例。

こひ たね む す め かほ さでちようにたうきよ うつしゑ
恋の種まく小姐の顔に、恰彷彿浮世が伝神、(『曲亭伝奇花釵児』鳶屋重三郎、享和4年1月、新日本古典文学大系80、p.134)2例。

馬琴の『八犬伝』や『近世説美少年録』『開卷驚奇侠客伝』に、「^{あにき}哥・^{あにき}哥々・^{あにき}大哥・^{ごりやう}小姐・^{ひめ}小姐」の例が見られる。馬琴の漢字表記の特徴は、中国語の漢字表記が多様に用いられている傾向があるものの、全てといってもいいほど和語読み⁸⁾をしていることである。「～哥・～姐」の語にも音読みは一つもなく、読者をして分かりやすく読ませるように

8) 羅工洙(2005.05)「馬琴作読本における中国俗語的話題轉換語」『日語日文学研究』第53輯、韓国日語日文学会、pp.97-120

工夫している。馬琴の訓から分かるように、「～哥・～姐」の語は中国では多様な訓があったが、日本では非常に単純な「あに・あね」の訓と、「小姐」の場合の「むすめ・おじょうさん・ひめ・ごりょう」という変形した意味として受入れられていることが窺われる。

馬琴以外の作品では、管見では鳶屋重三郎の『曲亭伝奇花釵児』に「小姐」が見られる。近世日本の読本類では、馬琴の作品に中国語の漢字表記が多様に見られる。

以上、主に近世の文学作品に現れている「～哥・～姐」の語の使用実態を考察した。多様な形の「～哥・～姐」の語が収録されていて、唐話学の影響がかなりあったことが把握できた。また、ジャンルによっては音読になっているものもあって、『日国大』に登録されていないのは問題であることもわかった。では、近代の普通の文学作品にはどういう語が用いられていたのかを見てみよう。

4. 近代文学における「～哥・～姐」の語

近代に入ってから、大量の言語資料、特に文学作品が刊行されている。近代はまた、中国俗文学を好んで読んでいた作家も少からずいる⁹⁾。英学の時代であった明治期になっても、依然として唐話学は残っていたわけである。このような現象が、作家の言語生活にもある程度の影響を及ぼしていたことは十分予想される。ここでは、明治期以後の作品を通して「～哥・～姐」の語の使用実態を見ることにするが、作品も多く出現する語の量も多いので、各語別に考察することにする。

「哥・哥哥」

此哥等^{あにら}が酒錢に当らず(『文明花園』服部誠一、明治21年1月、リプリント日本近代文学96、p.276) 1例。

そうサ、小平哥々^{あにいへまあやつ}失錯^{あやまち}遣ちやいけねへぜ。(『塩原多助一代記』三遊亭円朝、明治18年1月、明文全10、p.100)9例

ホロリと溢す一滴^{こぼり}は早くも哥々^{あにめ}の目に触れて其心の哀嘆^{そのころあいたん}は～(『文明花園』服部誠一、明治21年1月、リプリント日本近代文学96、p.26)72例。哥々^{おあにさん}p.238、2例。

9) 羅工洙(2005.09)「近代における唐話学の残影」『日本語学研究』第13輯、韓国日本語学会、pp.43-63

^{あにい} ^い ^{ひと} ^{たて} ^{あたま} ^さ ^{じつ} ^{じつ} ^{くる}
哥々と人に立られ頭を下げられるのは実に心が苦しい(『後開榛名の梅が香』三遊亭円朝、明治18-22年、円朝全集2、p.275)8例。

^{あに} ^い ^{おつか} ^{だま}
哥々々々。阿母さん黙つておいでなさい。(『業平文治漂流奇談』三遊亭円朝、明治18-22年、円朝全集3、p.15)3例。

哥々(『飛騨越日記』遅塚麗水、明治41年6月。明文全94、p.281)1例。^か ^か
哥哥(『国訳忠義水滸伝』幸田露伴、大正12年、露伴全集33、p.91)多例。^{あにうへ}
哥々(『文明花園春告鳥』後編、服部誠一、明治21年1月、リブリント日本近代文学97、p.28)4例。

現在のところ、「哥」を単独で用いる例は服部誠一の作品にのみ見られ、複数の形で用いられている。大部分の例は、重複の「哥哥」である。音読の「かか」は幸田露伴の作品に見られ、無訓の例もある。訓としては、「あに・あにい・おあにさん・あにうへ」がある。三遊亭円朝は、「あにい」のように「あにき」を親しみを込めた俗的な読みをし、その文脈に合わせた表現をしている。漢字表記から見れば、「哥哥」のところに「兄」を入れても何の違和感もなしに意思伝達ができるのだが、わざわざ「哥哥」という中国語の例を用いていた。

「大哥」

^よ ^{きういう} ^{いうていた} ^{かげふ} ^つ ^ね ^{にせきじやう}
余が旧友三遊亭大哥業として平常席上に～(『後開榛名の梅が香』三遊亭円朝、明治18-22年、円朝全集2、p.93)1例。^{あに}
大哥p.259、5例。

^ば ^{きんおち} ^ろ ^{ぶんあに} ^い ^{まなび} ^ひ
馬琴翁と魯文大哥と。学問を比せば、(『西洋道中膝栗毛』仮名垣魯文、明治3年、明文全1、p.53)2例。

^{おも} ^{おやかた} ^{ごじんりよく} ^{おひおひ} ^{かたき}
「思ひがけない大哥の御尽力にて追々に敵を～」(『蝶島紫裾模様』高島藍泉、明治13年9月、明文全2、p.177)3例

^{おも} ^{あにき} ^{おやぢ} ^{もの} ^か
想ふに大哥とても愚父の財ならば借るべし(『文明花園』服部誠一、明治21年1月、リブリント日本近代文学96、p.75)16例。大哥p.276、3例。

^{しか} ^に ^い ^{まけ} ^{かち}
併し大哥さん負るは勝だヨ(『緑林門松竹』三遊亭円朝、明治21年1月、円朝全集6、p.180)1例。

^{あにき}
大哥(『高橋阿伝夜夜刃譚』仮名垣魯文、明治12年2月、明文全2、p.23)1例、大哥(『嶋田一郎梅雨日記』仮名垣魯文、明治12年7月、明文全2、p.68)1例、^{あにい}
大哥(『雨』広津柳浪、明治35年10月、明

文全19、p.35)1例、大哥^{あにい}(『亀甲鶴』小栗風葉、明治29年12月。明文全65、p.177)7例、大哥^{たいか}(『国訳忠義水滸伝』幸田露伴、大正12年、露伴全集33、p.81)多例。大哥^{あにい}(『恋慕ながし』須藤南翠、明治33年5月、リプリント日本近代文学141、p.235)1例、大哥^{あにい}(『偽金』尾崎紅葉、明治35年1月、紅葉全集8、p.225)1例、大哥^{あにい}(『茨木阿滝紛自系』鈴木金次郎訳、明治19年2月、リプリント日本近代文学92、p.248)1例、大哥^{あにき}(『自由艶舌女文章』小室案外、明治17年、明治文化全集21、p.94)1例、大哥^{あにい}(『緑林門松竹』三遊亭円朝、明治21年1月、円朝全集6、p.180)1例。

「大哥」は、「哥哥」よりは使用範囲が廣い語である。ここでも音読の「たいか」があり、無訓のものもある。幸田露伴の『国訳忠義水滸伝』の例は、中国語をそのまま音読みする露伴の傾向の現れであるものと思われる。「大哥」の意味は「哥哥」とほぼ同様である。訓を見ると、「あにき・あにい・おやかた・おほあにへ・にいさん」のように、「あに」に対する敬意を表した訓になっている。「哥哥」や「大哥」の例は、『漢語大詞典』に現れている意味から見れば、非常に狭小な意味を借用していると思われる。但し、男性に対する敬意をもった意味は『水滸伝』(おっとの意味もある)のような中国俗文学に多用されているので、唐話学を着実に反映している面があると言える。

「小哥」

エイ何にしても小哥^{なん わつちや うれし}ア。嬉うございやす(『鏡ヶ池操松影』三遊亭円朝、明治18-23年、円朝全集1、p.523)1例。

オ小哥^{あにひ}か、……哥^{あにい かへ}が帰ツたからお前^{めへ}おいで(『後開榛名の梅が香』三遊亭円朝、明治18-22年、円朝全集2、p.292)1例。小哥^{おら}p.494、1例。小哥^{てまい}p.459、2例。

「コー小哥^{あにきとんべ}昨夜」は(『最暗黒の東京』松原岩五郎、明治25年11月、新古典文学大系30、p.297)1例。

小哥^{わつち}p.9、55例。小哥^{わしら}p.125、1例。小哥^{わし}p.123、1例(『栗太口霏笛竹』三遊亭円朝、明治21年6月、円朝全集7)。小哥^{わつち}(『文七元結』三遊亭円朝、明治22年4月、円朝全集7、p.304)6例。小哥^{わつち}(『熱海土産温泉利書』三遊亭円朝、明治22年5月、円朝全集8、p.14)25例。小哥^{わし}p.249、7例。小哥^{わつし}p.271、2例。小哥^{わたし}p.278、1例。小哥^{わつち}p.281、6例(『霧隠伊香保煙』三遊亭円朝、明治22年7月、円朝全集8)。

わたし 小^{わたし}哥p.355、14例。わたくし 小^{わたくし}哥p.355、2例。わつち 小^{わつち}哥p.358、15例。わちき 小^{わちき}哥p.361、1例(『松と藤芸妓の替紋』三遊亭円朝、明治22年10月、円朝全集8)。わッち 小^{わッち}哥(『緑林門松竹』三遊亭円朝、明治21年1月、円朝全集6、p.173)1例。

「小^カ哥・小^{アニ・コ}哥・小^{アニ・キ}哥」があったのだが、翻訳以外には日本人による例はなかった。明治期の作品では、松原岩五郎の例を除いては全て三遊亭円朝の作品に用いられている。これは極特異な現象で、三遊亭好みの語であったものと思われる。松原岩五郎の例は「あにき」となっているが、三遊亭円朝の場合は多様な形の一人称の訓を施している。「小^カ哥」の読みは「あにひ」は1例のみで、「わし・わしら・わつし・わたし・わたくし・わつち・わちき・わつちや・おら・てまい」のように、「あに」とは関係のない徹底した一人称の「じぶん」として用いている。『漢語大詞典』によれば「わかものの男性」をさしている言葉であるが、ここではそれとは関係のない解釈をしている。近世の通俗和文では、「哥」の特性により「あに」の意味で読んでいたので、三遊亭円朝の読みは本人特有の訓ともいえよう。円朝の作品は講談物であるので、速記者が筆記するとき、中国語の漢字を借用したわけであるが、中国語の本来の呼称とは異なる自称として用いてしまったものである。その訓は「わたし」系の口頭語が多く、くだけた訓になっていることも特異といえよう。ただ、三遊亭が多少用いていた「大哥」の例では「あにい・にいさん」とともに読んでいる。作品とは別に、講談の文章化を速記者のものと見るべきか、三遊亭のものとするべきかは問題として残る。

「兄哥」

あにき われわれ たいしやう い れうしやう よ
兄^{あにき}哥は俺^{われわれ}門^{たいしやう}の大^い将^{れうしやう}と云^よひ領^よ袖^よと呼^よぶとも〜(『自由廻征矢』井上勤訳、明治17年9月、明治初期翻訳文学選、p.76)2例

あたり
四^{あたり}邊^{あたり}を憚^{あたり}る様^{あたり}に答^{あたり}へた。『隣^{あに}の兄^{にい}哥^{にい}か? 早^{あに}かつたなす。』(『赤痢』石川啄木、明治42年1月。明文全52、p.163)1例。

はは、立^{りつ}派^ぱだ一^ぱが、悪^{あく}魔^まの兄^{あに}哥^きは嘸^{さざ}悦^{よろこ}ぶだらう…(『善魔』自笑軒主人訳、明治40年1月、明治翻訳文学全集44、p.287)1例

あにき ど せうくわ よ
兄^{あにき}哥^どは何^{せうくわ}うも消^よ化^よが好^よくない。(『社会の敵』森豊峯訳、明治34年6月、明治翻訳文学全集47、

p.62)8例。

沼田の正とて大兄哥。(『起誓文』泉鏡花、明治35年11月、鏡花全集7、p.380)1例。

芝口界隈に是沙汰の小兄哥。(『柳の横町』泉鏡花、大正8年5月、鏡花全集20、p.5)1例。

だつて、兄哥、猫が鼠をくわえても、首実験だ。(『風流線』泉鏡花、明治36年10月、明文全21、

p.216)12例。大兄哥p.214、1例。

世を忍ぶ美術家に、兄哥、と思ふ、(『芍薬の歌』泉鏡花、大正7年7月、鏡花全集18、p.320)2例。

類彼の兄哥は件のニヤリで、(『朝湯』泉鏡花、大正12年5月、鏡花全集22、p.178)23例。

兄哥(『神鑿』)1例。兄哥(『起誓文』)2例。兄哥(『黒百合』)1例。兄哥(『辰巳巷談』)1例。兄哥(『白

鷺』)4例。兄哥(『類白鳥』)1例。兄哥(『無憂樹』)1例。兄哥(『女客』)1例。兄哥(『海異記』)7例。

兄哥(『狭言』)10例。兄哥(『式部小路』)2例。兄哥(『朝湯』)23例。兄哥たち(『彩色人情本』)4例。

兄哥(『鯛』)1例。兄哥(『柳の横町』)26例。兄哥(『芍薬の歌』)2例。兄哥(『浮舟』)1例。兄哥(『蒟蒻

本』)1例。兄哥(『色暦』)1例。兄哥(『三味線堀』)2例。兄哥(『黒百合』)1例。兄哥(『辰巳巷談』)1例。

兄哥(『歌行燈』)4例。兄哥(『柴手綱』)2例。兄哥(『婦系図』)2例。

「哥兄」

哥兄、己が檐がふと、今まで石を運び居たりし〜(『清水越』金子春夢、明治29年6月、明文全36、

p.376)2例。哥兄7例。

兄哥此处の寺に女が居るなア訝しい訳だ、(『後開榛名の梅が香』三遊亭円朝、明治18-22年、

円朝全集2、p.258)4例。兄哥p.306、1例。

哥兄々々 腹ア立つちやアいけねへ。(『業平文治漂流奇談』三遊亭円朝、明治18-22年、円朝全集3、

p.76)4例。

「兄哥」は、『漢語大詞典』や『大漢和辞典』にも登載されていない語である。また、「唐話辞書」をはじめ、日本に伝えられた中国俗文学¹⁰⁾や他の文学作品にも見られない独特の語であ

10) 中国の教育部から提供している古文献検索で「哥兄」が2例見られるが、本来の意味と異なっている

る。この語は、井上勤・石川啄木・自笑軒主人・森豊峯の作品にも見られるが、例文からも分かるように泉鏡花¹¹⁾が多用している。「兄哥」は、「兄+哥」のように、同義の二つの漢字が結び付いた異様な語である。この語は現在の中国のネットでも多く用いられているが、用法の上で異なり、別に口頭語としても用いられていないようである。「人名」や「名前」に「兄」を付け、さらに「哥」が付いたような形である。確かではないが、昔から中国で用いられていたものとは思われず、日本で先に造語されて用いられていたものと思われる。当然ながら『日国大』にもないので、Yahooの「weblio辞書」を参考にすると、「兄哥。読み方：あにき。1.比較的高給ノ官吏。〔第二類 人物風俗〕2.比較的高級なる官吏、又は刑事、巡査等を云ふ」という解釈をしている。出典は隠語大辞典となっているが、明治期以後からあまり知られていない語をあつめているものである。「兄哥」には音読の例はなく、「あにき・あにい」が主たる訓で、『神鑿』には「せなあ」の訓も見られる。「せなあ」は「せな」の変形で、「兄。兄貴。また、長兄のこと」(『日国大』)の意味である。「兄哥」はまた、順番を表す「おほあにい ちひあにひ」が泉鏡花の作品で用いられていたことも面白い現象であった。ともあれ、明治期以後から「兄哥」は漢語ではなく訓として用いられている漢字表記であった。

反面、「兄哥」の逆の形になっている「哥兄」の例もある。これも古い諸辞書や諸文献には登載されていない独特の語である。しかし、中国ネットでは見られるが、「兄哥」と同様、日本で先に用いられたものであるかは分かりにくい面がある。「哥兄」も同義の重複した形であるが、例としてはそれほど多くない。やはり音読の例はなく、「あにき・あにい・にひ」の訓を当てている。「兄哥」を多用していた泉鏡花は、逆の形は全く用いられていない。「weblio辞書」によれば、「哥兄」は、「読み方：あにい。1.仲間の者が他を推重して呼ぶ下層社会の語。転じて幅利(はばき)の者を指して云ふ語」である。下層社会の言語であることを具体的に明記している。但し、「兄哥」であれ「哥兄」であれ、「weblio辞書」は中国語との関係に全く言及していない。そういうわけで、その最初の出自は不明である。「哥」と関連して最後の例を見よう。

「阿哥・哥人」

あへ と あ かなんち せい な に
敢て問ふ阿哥^{アヘ}你的姓は甚麼。(『国訳忠義水滸伝』幸田露伴、大正12年、露伴全集33、p.103)

かん ちあにい めへ こ こし ごと き
ワ々堪次阿哥^{アヘ}かお前此処仕事に來たのか(『蝦夷錦故郷の家土産』三遊亭円朝、明治19年-20年、

し、『元史』は、原文と異なっているようである。

11) 用例(『鏡花全集』、岩波書店)が多いので、刊行年度、全集番号、ページを省略した。

円朝全集3、p.328)1例。

「さうは云つちやい、阿哥^{あにい}も、お前商売をして居りやア、～」(『少年行』中村星湖、明治40年5月、現代日本文学全集84、p.234)9例

だが阿哥^{あにい}、己アお前^{おれ}が羨ましいよ。(『老車夫』内田魯庵、明治31年9月、明文全24、p.42)30例。

哥人^{あにいあけ}明て呉れ、山田屋^{やまだや}でも心配^{しんぱい}して居るから(『後開榛名の梅が香』三遊亭円朝、明治18-22年、円朝全集2、p.277)1例。

阿哥^{あにい}(『少年行』中村星湖、明治40年5月、現文全84、p.238)9例。阿哥^{あにい}(『みみずのたはこと』徳富蘆花、大正2年3月、明文全42、p.259)1例。阿哥^{あにい}(『緑林門松竹』三遊亭円朝、明治21年1月、円朝全集6、p.141)25例。阿哥^{あにき}(『緑林門松竹』三遊亭円朝、明治21年1月、円朝全集6、p.137)3例。

近代文学における「哥」と関連した語は、上の例が最後である。「阿哥」と「哥人」があるが、「哥人」(あにい)は三遊亭の作品に1例見られ、大変珍しい用例である。「阿哥」も多くないが、一般的な「哥」関係の語と意味の上で差はない。「阿」¹²⁾は、「人名」や「呼称」の前に立つ接頭辞(『漢語大詞典』)で、「哥哥」の意味を持っているものである。「阿哥」には、幸田露伴の作品に音読の「あか」があり(『日国大』には登載されていない)、その他は「あにき・あにい」と讀まれていた。「阿哥」も中国俗文学で多用されているので、唐話学の影響と思われる。

以上、近代文学における「～哥」関係の語を考察してみたところ、「哥・哥哥・大哥・小哥・兄哥・哥兄・阿哥・哥人」の多様な例がみられた。「兄哥・哥兄」は、現在中国で用いられているが、歴史が浅いためか中国俗文献や辞書にも登録されていない問題の語である。「～哥」関係の語は、中国では種々の意味があったが、日本では敬意が含まれた「あに」系統の意味に限定された用法になっている。また、「小哥」の場合は、三遊亭が好んで用いていたが、大部分が中国の意味とは関係のない一人称の「わたし」系統の意味で用いられていたことも特異な現象であった。そして、「かか・たいか・あか」のように、音読みをしているところもやはり見られるが、『日国大』に登録されていないものもあるので、これから考慮すべきである。次は、女性に使う「～姐」の語について詳しく見てみよう。

12) 「阿」と関連した呼称の受入れについては、次回に詳しく考察しよう思う。

「姐さん・姐様」

姐さんねえおねがひ願あしたですから明日一寸拝借な〜(『憂喜世の夢』斎藤緑雨、明治19年8月、斎藤緑雨全集5、p.143)3例

「おや小糸姐さんねえですか。(『霽』長田幹彦、明治44年11月、現代日本文学全集84、p.362)2例

お茶屋さんと家の姐さんうち ねえとに頼まれて、(『若旦那』永井荷風、明治45年3月。明文全73、p.291)2

例。「姐ねえは何時見ても美麗きれ いだね、ははははは。(『機動演習』田口掬江、明治36年1月、現文全84、p.219)3例。

姐様ねえさんが来たり何なんかしたもんだから。(『紺暖簾』山岸荷葉、明治34年6月、明文全22、p.264)7例。

姐さんp.265。48例。姐ちゃんp.256、9例。

乃至天な い しの生なせる美術品とも申すべき綺麗ねえさまたちな姐様達ねえさまたちばかりが京都きやうとの産物か。(『辻浄瑠璃』幸田露伴、明治24年2月、露伴全集5、p.51)1例。

持病ちびやうでも発おこつて、ええ？姐様ねえさん。」(『恋慕ながし』須藤南翠、明治33年5月、リプリント日本近代文学141、p.155)1例。

姐さんねえ(『当世書生氣質』坪内逍遙、明治18年6月、明文全16、p.151)1例。(『金色夜叉』尾崎紅葉、明治31年～36年、明文全18、p.296)1例。(『日用帳』斎藤緑雨、明治32年5月、明文全28、p.358)1例。(『良人の自由』木下尚江、明治37年12月、明文全45、p.170)6例。(『深川女房』小栗風葉、明治38年3月。明文全65、p.239)1例。(『名花』永井荷風、明治45年6月。明文全73、p.306)4例。(『起誓文』泉鏡花、明治35年11月、鏡花全集7、p.314)1例。(『冷笑』永井荷風、明治43年2月、荷風全集4、p.394)3例。(『老圓紙幣の履歴ばなし』坪内逍遙、明治23年2月、逍遙選集8、p.17)1例。(『小説餘稿』幸田露伴、明治22年～明治44年、露伴全集10、p.168)1例。(『七変化』幸田露伴、明治23年11月、露伴全集1、p.523)1例。(『松と藤芸妓の替紋』三遊亭円朝、明治22年10月、円朝全集8、p.362)1例。(『霧隠伊香保煙』三遊亭円朝、明治22年7月、円朝全集8、p.245)1例。(『椿姫』田口菊汀訳、明治44年3月、明治翻訳文学全集26、p.299)13例。(『ウォーレン夫人の職業』坪内逍遙、大正2年3月、逍遙選集5、p.844)1例。(『労働者誘拐』江口渙、大正7年4月、現文全85、p.84)1例。(『勲章』徳田秋声、昭和10年10月、現文全63、p.405)2例。

単独で用いられている「姐」の例は、「哥」に比べるとはるかに多いことがわかる。音読みはなく、「姐さんねえ」が大部分を占めている。「姐ねえ」の例は極少数である。また、「姐さんねえ」の「さん」の接尾辞を漢字表記にする「姐様ねえさん」や「姐ちゃん」もあるなど、和語の接尾辞を交ぜた

形を巧く活用しているのが面白い。『漢語大詞典』には多くの意味があったが、日本では「④ 対一般的同輩女性的敬称」を一般的に用いていながらも、必ずしも敬意を込めている時でなくとも用いられている。また、斎藤緑雨や永井荷風、長田幹彦、三遊亭円朝などのように、「⑥ 指妓女」と同様の「芸者」の意味として用いている場合もかなりある。ともあれ、「一姐」の語の基礎をなす「姐」が日本ではやはり限られた意味用法になっていたことがわかった。

「姐姐」

此金銀^{ひろ}拾ヒ以テ姐々ヲ見ル(『鴛鴦春話』和田竹秋、明治13年2月、国会図書館蔵本、p.1ノ12)28例

ねへ姐々左様ぢやありませんか、(『僥倖』幸田露伴、明治29年2月、露伴全集2、p.503)5例。

三蔵殿^{さんざう}の乙娘^{おとむすめ}に姐々^{あねさま}何か嬉しい事のあるかよと～(『新羽衣物語』幸田露伴、明治30年8月、露伴全集3、p.13)1例。

反面、管見では「姐」を重ねた形の「姐姐」は上の例しか見られない。意味は「ねえさん・あねさま」であるが、幸田露伴の『僥倖』では、芸者を呼ぶときの様子も見られる。この意味用法は、単独で用いられている「姐・姐様」と同じである。

「大姐」

大姐^{ねいさん}はばかりだが何^{なん}とかいって。(『当世書生気質』坪内逍遙、明治18年6月、明文全16、p.111)3

例。大姐^{あねへ}p.111、1例。

現にこの土地に大姐^{げん}さんの株^{おほねい}で、苦しみながら～(『紺暖簾』山岸荷葉、明治34年6月、明文全22、p.313)1例。

お大姐^{だま}さんを瞞^{だま}して見やがれ、誰は置かねえから。(『絶望』徳田秋声、明治40年12月。明文全68、p.148)1例。

三十何歳^{いくつ}まで深川切^{ふかがわきり}ての大姐^{おほあね}でゐたが。(『侠足袋』塚原洪柿園、明治35年1月。明文全89、p.266)1例。

他の妓等^{せんなら}の大姐^{ねいさん}々々と呼ぶにて彼等が中にての～(『僥倖』幸田露伴、明治29年2月、露伴全集2、p.497)3例。

姉の順番を表す「大姐」は、出典は少いけれども音読はなく、「大姐^{ねいさん}・大姐^{あねへ}・大姐さん^{おほねい}・大姐^{おほあね}・お大姐さん」と多様な読みが見られる。ここでは、徳田秋声の『絶望』を除き、まともな女性の敬称はなく、芸者や芸妓の呼称として用いられている。この面から見れば、「～哥」とは異なり、女性に対する敬意よりは皮肉のような用法が多いことが特徴と見られる。

「小姐」

それの小姐^{せうしやう}頃字を学ぶなり。(『西京傳新記』菊池三溪、明治7年12月、新古典文学大系、明治編1、p.241)3例。

令正^{れいせい}ハ是レ族家ノ小姐^{せうしやう}、恩愛^{おんあい}共ニ深シ(『鴛鴦春話』和田竹秋、明治13年2月、国会図書館蔵本、p.2ノ80)4例。

因ツテ一書ヲ小姐^{せうしやう}ニ残シ去ル、(『泰西活劇春窓綺話』坪内逍遙訳、明治17年1月、明治文化全集22、p.413)84例。

當昔^{そのかみ}は他の商店の一從僕^{ボーイ}野菜^{かんご}監^{かた}肩^{ゆきき}に擔^{あねご}げて往来^{よば}なし小姐^{せうしやう}呼はりしたる健二さへ、(『聯島大王』古宮山天香、明治20年11月、明文全6、p.406)1例。

小姐^{あねへ}に驚^{おどろ}き恐^{おそ}れ玉^{たま}ふなよ(『文明花園春告鳥』服部誠一、明治21年1月、リプリント日本近代文学96、p.275)2例。

ぢや、感所^{かんところ}の利^きかねえ小姐^{ねんねえ}かと云ふに、(『恋慕ながし』小栗風葉、明治33年5月、リプリント日本近代文学141、p.290)1例。

次郎長^{じろ ちやう}が乾兄^{こぶん}の小姐^{ちひあねえ}か、田舎茶屋^{あなかぢやや}の女房^{にようぼう}といつた風^{ふう}、(『軍事通信員』泉鏡花、明治37年7月、鏡花全集9、p.17)1例。

娘も未だ年^{とし}は行つても全小姐^{からねんねえ}なんだから、親も最う少し先へ～(『深川女房』小栗風葉、明治38年3月。明文全65、p.239)1例。

若し君か主婦^{しゆうそ}の小姐^{せうそ}あらすば之れに月珠を～(『月珠』省庵居士訳、明治22年6月、明治翻訳文学全集9、p.14)70例。小姐^{しやうそ}p.218、7例。

何、小姐^{なに ねえ}さんは返^{かへ}して貰^{もら}ふおつもりぢやございませんのに、(『註文帳』泉鏡花、明治34年4月、鏡花全集6、p.634)1例。

小姐^{しやうそ}(『山家の恋』原抱一庵訳、明治36年1月、明治翻訳文学全集20、p.278)5例。

「小姐」の例は「大姐」よりは多用されているが、全般的に見ると多いとはいえない。特に『泰西活劇春窓綺話』(坪内逍遙訳)で多用されているのが特異である。『西京傳新記』では音読みと訓読みを併記してあり、『月珠』(省庵居士訳)には音読の例が見られる。また、中国俗文学では用いられていない「^{しやうそ}少姐・^{ねえ}少姐さん」の「少姐」の例も見られる。これは、中国のネットでも用いられていないことから、日本で創作あるいは誤記で用いられていたと思われる。『日国大』では「小姐」を「年若い娘」としているが、中国の例を挙げている(訓としては『八犬伝』の例が載せてある)。『日国大』に「小姐」の日本の音読みの例がないことと「少姐」がないことは問題として残る。「小姐」は、無訓のほか「^{しょうだつ}小姐・^{あねご}小姐・^{あねへ}小姐・^{ねんねえ}小姐・^{ちひあねえ}小姐」が見られる。『鴛鴦春話』に見られる「しょうだつ」は、大型辞書にもないのでどういう意味なのか不知であるが、文脈上「むすめ」に当たる。「大姐」の場合は芸者・芸妓の呼称として用いられていたが、普通の「あね」として用いられている例は『聯島大王』(古宮山天香)のみで、「むすめ・少女・こめろう・年増・ねんねえ」のように、芸者の例は見られない。「こめろう」は「少女。また、少女をののしっていう語」(『日国大』)、「ねんねえ」は「幼児。赤子(あかご)。子ども。また、赤ん坊のように幼稚であることや、その人。世間知らず。ねんえい」(『日国大』)とあるように、女性を軽んずるような表現も見られる。こういうのも、中国本来の意味とは少々異なる面である。最後に次のような例も見られる。

「その他」

^{げいしやねへはん}藝妓阿姐会といふ事を計らむ、(『幸堂滑稽談』幸堂得知、明治29年1月、明文全26、p.177)1例。

否々^{ケイカイ}尊姐何ソ警戒ノ^{ウス}薄キヤ(『欧州奇事花柳春話初編』丹羽純一郎訳、明治11年10月、明治初期翻訳文学選、p.71)1例

昨日^{オクサマ}君尊姐の手を携へて、演劇を金杉に観るは～(『東京新繁昌記』服部撫松、明治7年4月、明文全4、p.222)11例

幸いにして^{おくさまごしんぞ}婦人尊姐となるべきや(『稚児桜』服部撫松、明治20年6月、明文全4、p.269)1例

『お豊さん^{あんた}貴姐には誠に面白い。～』(『社会詩人』内田魯庵、明治35年5月、内田魯庵全集10、p.414)1例。

他に、「へ姐」の語には「^{ねへはん}阿姐・^{オクサマ}尊姐・^{ごしんぞ}尊姐・^{あんた}貴姐」の例が少々見られる。『漢語大詞典』に

は「阿姐」は登録されているが、「尊姐・貴姐」は見られない。代りに中国のネットでは用いられているので、比較的最近用いられるようになった語ではないかと思われる。「阿姐」は芸妓に用いているが、「尊姐・貴姐」の「尊・貴」が意味するように、恋愛の相手、あるいは「おくさん・つま」に対する敬意の籠った意味で用いられているのも特異な用法である。

日本の近代文学作品に現れている「～哥・～姐」の語には「哥・哥哥・大哥・小哥・兄哥・哥兄・阿哥・姐・姐様・姐姐・大姐・小姐・少姐・阿姐・尊姐・貴姐」があり、普通の日本文学にも種々の形で多用されている。基本的には「兄・姉」やかなで表記しても意思伝達のうえでは何の不自然さもないのに、一般の読者には馴染みのない漢字表記をしていて却って難解な文になってしまう傾向がある。幸い読者のために大部分和語の訓を付けているので解釈上の問題はなかった。しかし、中国語本来の意味が縮小されたり、日本独特の意味で用いられったりするなどの問題はあった。また、「大哥(たいか)・小哥(しょうか)・小姐(しょうそ)・少姐(しょうそ)」が『日国大』に登録されていないのも問題であろう。

森岡健二は、『続々世界商売往来』に現れている一部の中国語をさして、「漢語が中国語で、その中国語に日本語のルビを振ったものであるから、日本語から見ると中国語は宛字になるわけで、このような用字法を『宛字式の表記』と呼ぶことができる」¹³⁾と指摘し、「宛字式の表記」という用語を用いている。これにより、「漢字使用による独特のレトリックを発達させた」¹⁴⁾としている。岡田袈裟男も『通俗醒世恒言』や『八犬伝』の例を挙げながら、「漢語語彙は知識、教養階級のファッション感覚に貢献してきたのである。すなわち、まぎれもない、レトリックとしてこれらの語彙が供給されたのである」¹⁵⁾としている。つまり、難解な中国語で表記しているのは「宛字式の表記」でもあり、文字の「ファッション」や「レトリック」的な効果をも発揮していたと思われるのである。筆者はこのような現象を「術学的」な漢字表記ともいっているが、日本語の意味にあたる中国語を借りる形の「訓借字」的な要素もあったわけである。

5. おわりに

本稿は、日本の近世や近代の文学作品における人称や呼称に関する漢字表記の問題を

13) 森岡健二(2004)『日本語と漢字』明治書院、p.131

14) 前掲書、p.133

15) 岡田袈裟男(2006)『江戸の翻訳空間』笠間書院、p.219

扱ったもので、今回は「ㄱ哥・ㄱ姐」の語について考察した。今の「兄・姉」に当るものである。中国では古来、「哥・哥哥・哥子・哥兒・哥們・大哥・小哥・小哥子・小二哥・小大哥・阿哥・大阿哥・小阿哥・姐・姐姐・大姐・大姐姐・小大姐・小姐・小大姐・阿姐・姐夫・姐妹」の例があり、その用例はかなり多様である。これは漢語ではなく、唐代以後用いられてきた口頭語(白話語彙)であった。これは、文言の性格が殆んどなかったためか、日本の古辞書である「漢語辞書」には登録されていない。

日本では、近世以来の唐話学のブームによって、中国俗文学の受入れや中国語の学習などが行われた。しかし、文学や会話に現れている中国語は難解な語が多かったので、所謂唐話辞書を作り普及させていたが、そこに「ㄱ哥・ㄱ姐」の語が多く登載されている。また、近世日本に伝えられた中国俗文学やそれを分かりやすく翻訳した和文にも用いられている。用いられている語は、「哥哥・大哥・小哥・小二哥・姐・姐姐・大姐・小姐・二姐・阿姐・令姐・姐妹」など多くの例がある。普通の読者に分かりやすく読ませるためには、伝来の漢字表記をするべきであろう。このような現象は、中国俗文学をまねて出来た「日本人作白話文学」や当時の俗世間の様子を風刺している「漢文戯作」にもやはり観察される。これらの作品には、「哥哥・大哥・姐・姐姐・大姐・小姐・尊姐」の例が見られる。

さらに、曲亭馬琴の読本にも用いられるなど、近世の多様なジャンルに現れている。馬琴は「哥哥・大哥・姐・小姐」を用いている。

近代になっても唐話学の残影があり、依然として人気を博していた。その影響か、明治期の作家の作品にも中国語がちりばめられている。そこには、「哥・哥哥・大哥・小哥・兄哥・哥兄・阿哥・姐・姐様・姐姐・大姐・小姐・少姐・阿姐・尊姐・貴姐」の多様な語が見られた。特に、中国の辞書や古文獻には見られないが、現在中国のインターネットには用いられている「兄哥・哥兄」の例は特異である。また、「尊姐・貴姐」も中国の俗文学では目立たないが、現在の中国のネットでは用いられている。しかし、明治期に用いられているので、どちらが先に用いたのかは明らかでない状態である。

「哥哥・大哥・小哥・老哥・阿哥・姐姐・大姐・小姐・少姐・阿姐」は各々音読みで讀まれたものもあるので、『日国大』に登録していいと思われる。たとえば、中国の例を挙げている「小姐」は、見出し語としてあるのに上記の例がないのは問題である。ただし、用例はあまり多くない。大部分が訓読みとして用いられていることから分かるだろう。また、基本的に中国本来の意味用法が縮小されたり、日本的な意味で用いられったりする例もあることが特徴である。

「ㄱ哥・ㄱ姐」の語でなくても、伝来の「兄・姉」のような漢字を以て何の違和感もなしに

意思伝達ができるのに、わざわざ一般の読者に中国語で表記し、その訓を当てている。これはつまり、「ㄣ哥・ㄣ姐」の語は一種の訓借の語で、文学における漢字表記を豊かにする手段でもあり、また当時の作者の知識を発揮する手段でもあったと思われる。このように近世や近代には、唐話学が言語の世界(特に漢字表記)にも大きな影響を及ぼしていたことが分かった。

外にも日本における人称や呼称は実に多様に存在するが、普通は馴染まない異様な漢字表記が種々ある。特に中国語や古い漢語のものが多いのだが、どのように受入れられたのかというその受容と展開については、今後の課題にしたい。

【参考文献】

- 遠藤好英(1988)『近代文学と漢字』『近代文学と漢字 漢字講座9』明治書院
 岡田袈裟男(2006)『江戸の翻訳空間』笠間書院
 小田切文洋(2008)『唐話用例辞典』笠間書院
 香坂順一(1995)『《水滸》語彙と現代語』光生館
 _____(1983)『白話語彙の研究』光生館
 _____(1987)『《水滸》語彙の研究』光生館
 小島憲之(1983)『ことばの重み—鴉外の謎を解く漢語』新潮社
 _____(1988)『日本文学における漢語表現』岩波書店
 _____(1995)『漢語逍遙』岩波書店
 近藤瑞子(2001)『近代日本語における用字法の変遷—尾崎紅葉を中心に—』翰林書房
 森岡健二(2004)『日本語と漢字』明治書院
 羅工洙(2004.08)「山田美妙著『漢語古諺熟語大辞典』の唐話資料的性格」『日本語学研究』第10輯、韓国日本語学会
 _____(2004.12)「山田美妙著『新編漢語辞林』の唐話辞書的性格」『日本語文学』第23輯、韓国日本語文学会
 _____(2005.05)「馬琴作読本における中国俗語的話題轉換語」『日語日文学研究』第53輯、韓国日語日文学会
 _____(2005.09)「近代における唐話学の残影」『日本語学研究』第13輯、韓国日本語学会
 _____(2015.12)「近代に於ける『乃+N』の語の意味用法について」『日本語文学』第67輯、韓国日本語文学会
 _____(2016.02)「近世・近代に於ける『所天・良人』について」『日本近代学研究』第51輯、韓国日本近代学会

논문투고일 : 2016년 07월 08일
 심사개시일 : 2016년 07월 17일
 1차 수정일 : 2016년 08월 04일
 2차 수정일 : 2016년 08월 11일
 게재확정일 : 2016년 08월 15일

 <要旨>

近世・近代における中国語の「～哥・～姐」の受容と展開

羅工洙

本稿は、日本の近世や近代の文学作品における人称や呼称に関する漢字表記の問題を扱ったもので、今回は「～哥・～姐」の話について考察した。今の「兄・姉」に当るものである。中国では古来、「哥・哥哥・哥子・哥兒・哥們・大哥・小哥・小哥哥・小二哥・小大哥・阿哥・大阿哥・小阿哥・姐・姐姐・大姐・大姐姐・小大姐・小姐・小大姐・阿姐・姐夫・姐妹」の例があり、その用例はかなり多様である。これは漢語ではなく、唐代以後用いられてきた口頭語(白話語彙)であった。これは、文言の性格が殆んどなかったためか、日本の古辞書である「漢語辞書」には登録されていない。

日本では、近世以来の唐話学のブームによって、中国俗文学の受入れや中国語の学習などが行われた。近世には、唐話辞書、中国俗文学やそれを分かりやすく翻訳した和文、「日本人作白話文学」、「漢文戯作」、読本に現れている。

近代になっても唐話学の残影があり、依然として人気を博していた。その影響か、明治期の作家の作品にも中国語がちりばめられている。そこには、「哥・哥哥・大哥・小哥・兄哥・哥兄・阿哥・姐・姐様・姐姐・大姐・小姐・少姐・阿姐・尊姐・貴姐」の多様な語が見られた。ただし、用例はあまり多くない。大部分が訓読みとして用いられていることから分かるだろう。また、基本的に中国本来の意味用法が縮小されたり、日本的な意味で用いられたりする例もあることが特徴である。

About the Acceptance of “～哥～姐” of Words in Edo-Meiji

Na, Gong-Su

This paper deals with Chinese notation on the person or name that appears in the literature of the Meiji period in Japan with respect to “～哥～姐”, focusing on the current notation of “兄・姉”. In China, there are various examples of “哥哥・大哥・小哥・阿哥・姐姐・大姐・小姐・阿姐” and their usages vary. These were not Chinese written words, but have been spoken words since the Chinese Tang. These words had few characters of written languages, and thus have been not registered in old Japanese-chinese dictionary.

In Japan, due to the boom in China after the metallurgy 江戸, the acceptance of Chinese secular literature and learning of Chinese was popular. However, because Chinese literatures and paintings contained so many difficult words, pervasive Japanese-chinese dictionary registered “～哥～姐” very frequently.

Even in the era of 明治, there remained the trace of Chinese studies, and prevailed in the popular section. More or less, its impact worked in the Chinese usages from the works of 明治 times. There appeared the various expressions such as “哥・哥哥・大哥・小哥・兄哥・哥兄・阿哥・姐・姐様・姐姐・大姐・小姐・少姐・阿姐・尊姐・貴姐”. Most of them was used as Japanese renderings of Chinese letters. Also, by default, the original meaning of the Chinese usage were reduced or used as notations for the Japanese meanings.